

ガザとピラミッド 古代文明への幻想と現代史

エジプトの首都カイロはアフリカ最大の都市で、かつてはダマスカスと並ぶメッカ巡礼キャラバンの出発地。さぞかし交易と通商の要衝として繁栄の遺産がみられるに違いないと思っていたが、実際には貧困と軍人出身者による政権が支配する厳しい生活があった。

エジプトは第二次世界大戦後の植民地独立運動、そして中立同盟政策が華やかなりしころ脚光を浴びた。アラブ連盟を設立し、アラブ人の連帯を訴えたナセル大統領は、ユーゴのチトー、インドのネルー、ルーマニアのチャウシエスクと並んで第三世界のリーダーの一人であった。ナセル急死後、政権を継承したサダトは社会主義からの脱却を目指して強いリーダーシップを発揮し、一九七三年第四次中東戦争ではイスラエルに対して初めて軍事的勝利を得、さらにはイスラエルとの和平路線を導いた。だがムスリム同胞団による暗殺に倒れ、軍出身のムバラクが後を継ぎ現在にいたっている。

●古代文明と現代文明との狭間で

ピラミッドを意識してか、カイロはなにもかもが巨大なスケールである。空港から市内に向かうルートもただだっぴろい空間が支配している。

市内中心部の道路幅もやたらひろく、横断するのは命懸けである。なにしろ、交通規則というものが機能していない。ドライバーも歩行者も信号無視が当たり前、交通整理とおぼしき警官はたくさんいるが気まぐれでさほど機能しているとも思えない。のんびりと道路をみているばかりである。たまりかねて宿の主人に不満をおちまけると、彼は穏やかな口調でいう。

「システムというものは、部分的には変更できないものです」

つまり、数千台の自動車交通量で計算された都市が、四〇〇万台の自動車効率よく動かすのは土台むりなのだ。新しい都市を建設したほうがはやい。民主主義といふ環境問題といふ、現代社会におけるグローバル化がもたらす社会問題は、文化に根付いているという点で共通するかもしれない。文化にかかわる社会システムというものは、部分的に移植することはできないのだ。

●国際関係をめぐる歪なシステム

私がエジプトを離れてから、イスラエルによるガザ侵攻が始まった。連日の爆撃に市民が殺戮されていく。私が主に研究するルーマニアでも、ユダヤ人のアウシュヴィッツへの連

行、虐殺があった。歴史を通して民族浄化の悲劇は枚挙にいとまがない。ユダヤ人は確かにヨーロッパ諸国でいくたびも虐殺の対象となってきた被害者である。それから逃れるためには国家が必要であるという主張は理にかなっている。しかし、虐殺に関与しなかったパレスチナの人々に代償を払わせるのは理不尽だし、民族の虐殺に関する歴史的記憶が新たな虐殺を正当化する特権を生み出すわけではない。

かつてアラブの連帯と正義を掲げてイスラエルと戦ったエジプトだが、もはやガザの人びとのためにイスラエルとの和平を危険にさらすことはないだろう。エジプトの政権は、民衆の貧困と不満を軍力で抑えている綱渡り状態であるからだ。軍事的敗北は現政権の崩壊をまねく。イスラエル建国から五〇年を超え、ヨーロッパにおける虐殺の歴史的経験のなかから暴力的に建設された国家は、民主主義を標榜するアメリカの援助と軍事力に支えられ、金融資本主義をめざすアラブ世界の適応と妥協のなかで存続している。これも誇るべき民主主義と資本主義のシステムの一部というものなのだろうか。

新免光比呂
しんめんみつひろ
民博 民族文化研究部

専攻は宗教学、東欧研究。とくにルーマニアにおける民族と宗教文化を中心に研究する。最近では、バルカン地域におけるトルコの文化的影響や宗教と商業のネットワークに関心があり、その一環として2009年1月にエジプトを訪れた。



カイロの雑踏